日本骨髄バンクニュース
NEWS
Vol.23
http://www.jmdp.or.jp/
http://www.donorsnet.net/

移植5000例到達記念号

5000人のドナーさん、
ドナー登録者のみなさん、
ご支援いただいているすべてのみなさんに、
お礼の気持ちを込めて

日本骨髄バンクの現状（2003年9月末現在）
登録者数 17万5430人
移植数 5116件

CONTENTS

1 インタビュー（患者&ドナー）
妻の骨髄移植と同時期に提供した夫
骨髄バンク推進全国大会2003
2 特別対談「わたしと骨髄バンク」
横山秀夫vs菊間千乃
5 対面について
6 大会リポート&5000例に寄せられたメッセージ
8 データリポート
骨髄提供者アンケート／ドナー安全情報
日本骨髄バンクの現状／コーディネート新聞報道について
10 トピックス
骨髄バンク推進月間　新ポスター完成 他
映画「半落ち」チャリティー試写会
50組100名様ご招待!
11 お知らせ
コーディネーター募集のお知らせ
募金ご協力のお願い

平成15年12月3日発行
●発行／財団法人骨髄移植推進財団
●発行責任者／高久史麿（理事長）
●編集責任者／大石源誌（事務局長）
〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-19　廣瀬第2ビル7F
TEL.03-5280-8111　FAX.03-5280-0101

妻が移植のため入院した日は ドナーである夫の最終同意の日だった

INTERVIEW

**5000例到達記念の全国大会に参加された茨城県の細谷夫妻。
妻は移植経験者として、夫は骨髄提供者として。
移植から1年が過ぎ、いまでは夫と一緒に
ジョギングするほど元気になったみさ紀さん。
夫は妻を救ってくれた「誰か」を思いながら、
提供した「誰か」の健康を願っているそうです。**

移植を受け元気になった
細谷みさ紀さん

3年前、慢性骨髄性白血病と診断されました。私の場合は、骨髄バンクにHLAの適合するドナー登録者が70人もいると聞きました。だけど、やはりその時には移植ってすごく怖かったので、結局インターフェロンの治療を始めました。でも、適合するドナーの方がたくさんいるんだ、ということは気持ちの上でも支えになりました。8ヵ月間治療を続けましたが、髪の毛がかなり抜けて頭痛もひどくて。後から振り返っても移植の前処置よりインターフェロンの治療がつらかったですね。そして移植を決意しました。骨髄移植はすごく順調で、先生に「この大学病院で移植を受けた患者さんで2番目に元気だ」と言われたくらいです（笑）。私の移植後、主人も骨髄提供したのですが、その姿をそばで見ながら「私に提供してくださった方も、こんな風に何回も病院に行ったり検査したりしてくれたんだ…全然知らない人のために」と姿を重ね合わせて、さらに感謝の気持ちが強くなったように思います。

妻が告知を受けた翌日、私はドナー登録しました。とにかく病気の情報がほしいという不純な動機でしたが（笑）。でも、妻とHLAの適合するドナーの方たちの存在が、私たちを心強くしてくれたように、私も誰かの役に立ちたいと思うようになっていきました。妻の治療中にチャンスがやってきました。実は、妻が移植のために入院した日が、私の最終同意の日だったんです。妻を病院へ送り、私も手続きをするため他の病院へ向かいました。その3ヵ月後に骨髄提供。海外協力だったと聞いています。自分の骨髄が海を渡っていったというのもうれしい。もう1回チャンスがあれば、提供したいと思います。4歳と2歳の子供は、妻の病気のことはまだ理解できないと思いますが、「ママは、誰かに助けてもらって元気になったんだよ」と話しています。先日『友情』を観に行ったときも、下の子は脱毛した患者役の人を見て「あっ、髪の毛がママみたいになってる」と言って（笑）。登録会などにも積極的に連れていくようにしています。

骨髄提供した
細谷栄一さん

移植5000例
到達記念
骨髄バンク
推進全国大会
2003

特別対談

わたしと骨髄バンク

横山秀夫 ミステリー作家
VS 菊間千乃 フジテレビアナウンサー

早稲田大学 大隈講堂で行われた「骨髄バンク推進全国大会2003」。第2部では、人気ミステリー作家対テレビアナウンサーという華やかな組み合わせで特別対談が行われました。実はお2人とも骨髄バンクのドナー登録者。職業、そして生き方そのものを方向づけたという、お互いの体験を語りあいました。

ばれちゃいましたか（笑）自首するまでの2日間を謎にしたミステリーです

横山秀夫（よこやま ひでお）
●1957年 東京都生まれ　●1978年 国際商科大学（現・東京国際大学）を卒業後、上毛新聞社入社　●1991年 上毛新聞社退社、処女作『ルパンの消息』でサントリーミステリー大賞佳作　●1998年『陰の季節』で松本清張賞　●2000年 『動機』で日本推理作家協会賞　●2002年 『半落ち』がミステリー関係の複数の賞に輝く

移植5000例の軌跡

数字で見る11年半の実績

1993年（平成5年）1月28日、第1例の非血縁者間骨髄移植を実施。2003年8月で5000例に達した。1991年12月に骨髄移植推進財団が設立されてから11年半。日本の骨髄移植医療のめざましい進歩と骨髄バンク・移植を支える人たちによって、移植5000例という実績はもたらされた。（図1）

11年半の実績

2003年8月1日現在

移植件数	5000例
高い移植成績	（血縁比、海外比）
移植を希望した患者数	1万4656人
ドナー登録数	17万2759人
ドナー登録目標数	30万人
移植を待っている患者数	2196人

（図1）

菊間トーク

50歳がキーワードになっていますよね。ドナー登録している身としては、もしかして……と

菊間千乃（きくま ゆきの）
●1972年 東京都生まれ　●1995年 早稲田大学法学部卒業、フジテレビ入社　●現在 フジテレビの「発掘!あるある大事典」（日曜21時）、「こたえてちょーだい!」（月～金曜9時55分）にレギュラー出演中

菊間　横山さんと言えば『半落ち』。主役が骨髄バンクに登録している男性だったということでも話題になりましたが、私もいろいろな男性から薦められて読んだんですよ。とにかく涙するから読んでみて、と言われて。最初の方を読んで、50歳というのがキーワードになっていますから、骨髄バンクに登録している身としては、もしかして…と思って。

横山　ばれちゃいましたか（笑）。

菊間　と思って読み進めていって、読み終わったときに、これは骨髄バンクの関係者か、あるいは骨髄移植についてのかなり深い思いを持っていらっしゃる方が書かれた本なんだろうなと思ったんです。読んでいらっしゃらない方のために、少しだけあら筋をお話ししていただけませんか？

横山　小説のタイトルになっている「半落ち」というのは、警察に自首した犯人が半分は本当のことを話しているけれども、まだ話していない部分もあるという状態のことを言います。完全自供の「完落ち」に対しての「半落ち」で、警察用語なんです。ストーリーを簡単にお話しますと、実直な警部がアルツハイマーの妻に死なせてほしいと頼まれて手にかけてしまう。彼は後追い自殺をせず、2日間行方をくらませるんです。その後、自首して犯行は認めるけれど、2日間どこへ行ったのかだけはぜったいに口を割らない。半落ちですね。この2日間を謎にしたミステリーです。さっき菊間さんがばらしちゃったので言いますが（笑）、物語の後半で、この主人公は以前に病気で息子を亡くし、それを契機に骨髄バンクに登録してドナーになった経験を持っている人物であることが分かる。すべてを無くした男が最後に会いたいと思った人間が、自分が骨髄を提供した人間だった。つまり成長した息子の姿といいますか…。簡単に言うとそういう物語です。

菊間　そもそも横山さんがこういった内容の本を書こうと思われたきっかけは何だったのでしょうか？

横山　私の息子が中学生のときに病気にかかりまして、骨髄バンクを介してドナーの方を見つけていただきました。移植を受けて、今は元気に大学に通っていますけれども。自分のHLAは適合せず親として無力だったわけで、自分の子どもを救ってくれた誰かのためにお返ししたいという気持ちで妻と一緒にドナー登録しました。そしてたまたま私は書くことを仕事にしていますので、何かお役にたてればと思い、それが『半落ち』を書く一つのきっかけになりました。

菊間　書くにあたって、息子さんと話し合われましたか？

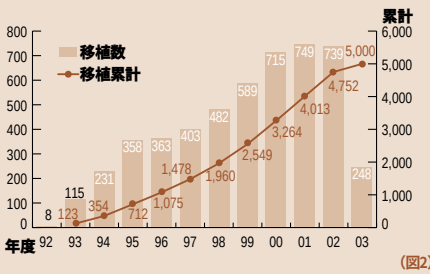
横山　ええ、話しました。骨髄移植をテーマにした小説を書きたいという思いは、息子の移植の後からずっと持っていたんですが、エンターテイメントとの兼ね合いという点で葛藤がありました。というのも、私は12年間新聞記者としてノンフィクションを書いてきて、転じて今はフィクションの世界で小説を書いていますよね。しかもそれはエンターテイメントと

1例1例ずつ重ねて

初めて骨髄バンクを介して移植が行われた1993年の非血縁間骨髄移植数は年間86例だった。1997年1月に1000例、2001年1月に3000例に到達。年間の移植数も700例を超えるようになった。1例1例の背後には、患者さん、ドナーさん、双方のご家族、職場、友人、そして医師を始めとする関係者の存在がある。

（図2）（図3）

骨髄バンクの移植例数



（図2）

骨髄バンクと移植を支える輪

厚生労働省	学会・医療界
日本赤十字社	認定移植病院　175科
骨髄データセンター	主治医　1000人
地方行政（登録窓口352カ所）	調整医師　680人
ボランティア数千人	地区代表協力医師　20人
地区普及広報委員　89人	コーディネーター　145人
財団役員・委員　112人	採取認定病院　133
事務局職員　65人	海外バンク

（図3）

一目お会いして、感謝の気持ちを伝えたい。それが人間の当たり前の思い——横山

いう、一生懸命働いていらっしゃる方々の娯楽の提供者でありたいと、そういう思いで書いている身ですので、骨髄移植という、私や私の家族にとって現実的で重いテーマを小説に盛り込むことが果たしていいのかどうかと。ただ、情報を盛り込むのではなくて、情の部分を抽出して書きたいんだという話をしましたら、息子も「いいと思うよ」と。

菊間　息子さんも骨髄移植を受け、苦しい病気を乗り越えられて、お父様から見ても明らかに人間的に成長したとおっしゃっていましたが。

横山　そうですね。やはり人間というのは年齢に関係なく、経験や体験というもので育つ部分もありますから。そういう意味では私が経験することのなかったことを中学生という若い時代に体験したということは、親子とはいえ、年齢が離れているとはいえ尊敬し、尊重して付き合っているつもりです。

菊間　『半落ち』を読んでドナー登録された方も多いんじゃないですか？

横山　読者カードが戻ってきますが、登録したという方もいらっしゃいますし、あるいは51歳まで登録していたが結局自分には最後まで提供する人が現れず悔しかった。誰かにこの思いを伝えたかったというものもありました。『半落ち』は、個人と組織の間でせめぎ合う男たちのドラマなんですが、反響はね、骨髄提供や命を分け与えるというテーマについてのものが非常に多かったですね。

菊間　先ほどエンターテイメントという話をされましたが、実は私も骨髄バンクに登録したのはテレビがきっかけなんです。94年の10月ですけれども、NHK特集で骨髄バンクのドキュメンタリーをやっているのを見て、なぜかものすごく突き動かされてすぐにNHKに電話しました。それで登録の仕方を聞いて、翌日には日赤へ行って登録したんです。

横山　ほぉー。

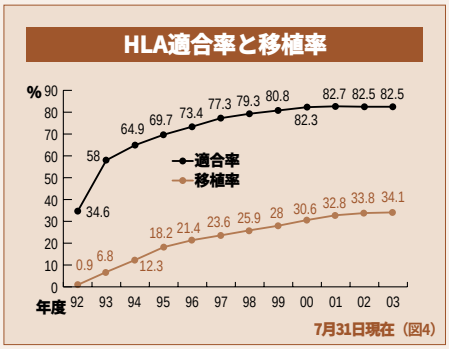
菊間　世の中で私、嫌いなものが3つあって。蛙とジェットコースターと注射（笑）、それくらい注射は嫌いなのに、登録するときに見たビデオで、小さいお子さんや患者さんが体にいっぱい管をつけて「善意の提供を待っています」、というのを見て、注射が嫌いなんて言ってちゃいけないなと思って。その時は何の迷いもなく腕を差し出したことを、もう10年も前ですが覚えています。それから日赤から帰る途中、今までテレビというのは一過性のもの、笑ったりスポーツ観戦してワーッと騒いだりして流れていくメディアだと思っていたんですが、テレビの一瞬を見て動いた自分を見て、テレビって、ものすごい可能性を秘めたメディアなんじゃないかと思いました。だから私はドナー登録がアナウンサーになるきっかけとも言えるんです。

横山　ああ、そうでしたか。

菊間　『半落ち』の中でも、ドナーである主人公がラーメン屋さんで働いている青年に会いにいって、自分が命を分け与えた人だと確信するけれども、でもお互いに名乗らないという風に描いていらっしゃいますよね。今回のこの大会でも「対面」に向けての動きがあったようですが、結局実現には至らなかったと聞いています。患者さんを息子さんに持つ親として、横山さんは「対面」という問題はどのようにとらえていらっしゃいますか？

適合率82％以上へ

HLA適合率は、1人以上のドナー候補者が見つかった患者さんの割合。骨髄バンクの発足当初は、ドナー登録数が少なく、移植を希望する患者さんの10人のうち3～4人しか適合するドナーが見つからず、さらに移植までこぎつけた人は全体の10～20％だった。現在では10人のうち8人はドナーが見つかっている。ただ、その後のドナーと患者さん双方の理由により、最終的に移植まで実現したのは、移植を希望した患者さん全体の約34％にとどまっている。（図4）



〔用語解説〕HLAの適合

ヒトの赤血球にA型、B型などの血液型があるように、白血球にも型がある。それがHLA（ヒト白血球抗原）と呼ばれるもの。HLAはA座、B座、DR座など多くの抗原の組み合わせで構成され、骨髄移植では、その適合が必要。

兄弟姉妹の間では4分の1の確率でHLAが一致するが、少子化で兄弟姉妹が少なくなっている現在、血縁者から適合者を探すのは難しくなってい

患者さんとドナーさんの「対面」について

骨髄バンクを介して移植を受けた患者さんと、提供者であるドナーさんは、対面を認められていません。それは、お互いの個人情報が相手に伝わると、金銭の授受につながったり、病気が再発したときに直接、再提供を依頼する恐れがあるなどの理由からでした。患者さんの「多くの諸外国の骨髄バンクで対面は認められている。一目会って、ドナーさんに感謝の気持ちを伝えたい」との声が強く、今回の全国大会で、調査研究としての患者さんとドナーさんとの対面を予定していました。しかし、財団の対面実施案に対して厚生労働省の「造血幹細胞移植委員会」では、継続審議されることとなったため、全国大会での実施は見送られました。対面をめぐる経緯と当財団の見解は次の通りです。

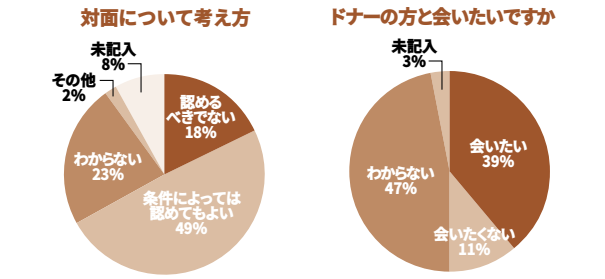
主な経緯

1993年1月の移植第1例で、患者さんの手紙を移植医があずかるなど、自然発生的に手紙のやりとりが始まり、その後制度化。1回だけの手紙のやりとりのみとした。その際、名前、住所、電話番号など個人が特定される情報は記さないよう要請（現在は年2回まで）。

1999年12月に「対面を調査研究として実施する」ことが、理事会、評議会の書面表決で「厳しい条件をつけた上で実施」する旨をそれぞれ賛成多数で承認。

2001年10月に移植患者さんとそのご家族を対象に実施した骨髄バンク10周年アンケートでは「条件によっては対面を認めてよい」とする意見が半数を占める（グラフ参照）。

2003年9月、上記のアンケートや財団における実施方法などの検討を踏まえて、厳しい条件（移植後4年を経過、患者とドナーが双方希望、住所・連絡先などは教えない、コーディネーターなど第3者が立ち会う、対面後に直接連絡を取らない、など）の下で試行的に対面を実施する案を国の専門委員会に提出。しかし「諸外国の対面事例の調査・分析がほしい」「お礼は手紙でもできるはず」などの意見により継続審議事項となった。



骨髄バンク10周年記念のアンケート調査（2001年11月実施）
骨髄バンクに登録した患者さん（あるいはその家族）を対象に行ったアンケート調査の結果です。3997通の発送を行ったうち、1302通（32.6%）の回答がありました。

見解と方針

骨髄バンクは、設立時から「あっせん機関として、患者、ドナー双方の匿名性を確保し、いかなる場合も患者とドナーの個人情報を保護する」という基本姿勢を貫いてきました。その姿勢は今後も変わることはありません。ただ、患者さんとドナーの双方が会いたい、お礼を言いたいという場合に、どのように応えていくか、その一つのあり方として、対面に関する検討を重ねていきます。

「対面」についての声～全国大会会場で～

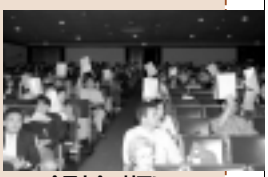
賛成派

対面をぜひ実現してほしかった

厚生労働省が反対しているのは憲法違反では?

次回は実施できるよう国へ働きかけてほしい

ドナーさんに会って「ありがとう」と心から言いたい



全国大会で対面について問いかけるシーン

慎重&反対派

命を落とした者には胸がつまります

よく分からない

対面に不安をいだいています

前向きに検討派

もっと議論を深めてほしい

対面についてのシンポジウムを企画して

移植5000例到達記念 骨髄バンク推進全国大会2003

アナウンサーになったのもドナー登録がきっかけ——菊間

横山　ドナーの方に対しては感謝してもしきれないですよ。当時は財団を通して1回だけ手紙のやりとりができました。息子も書きましたし、私たち親ももちろん書きましたが、書き尽くせるものではないですよね。一目お会いして、実際には、〝ありがとうございました〟という一言かもしれないけれど、感謝の気持ちを伝えたいというのは、これはもう人間の当たり前の情として動かしがたいものだと思います。

菊間　最後に、今日は移植5000例の到達記念大会でもあるんですけれど、横山さんご家族はその5000分の1にあたるわけですが、この5000という数字をどのように感じられますか?

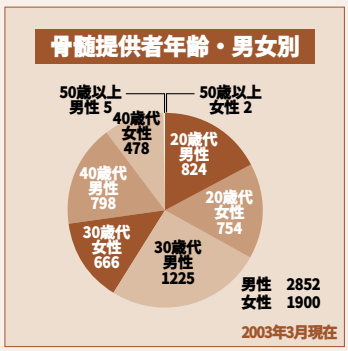
横山　本当に1件1件の積み重ねという意味では、気が遠くなるような大きな数字だと思います。ただ一方で、HLAが適合しなかった方がいらっしゃるという現実を思うとき、5000という数字は少ないと考えていくべきだとも思います。

菊間　ありがとうございました。

ある。非血縁者間でHLAが一致する確率は数百人～数万人に1人と低くなるため、30万人のドナー登録が必要となっている。

提供したドナーの年齢

骨髄バンクにドナー登録できるのは20歳～50歳までの健康な方。実際に提供できるのは51歳までとなっている。



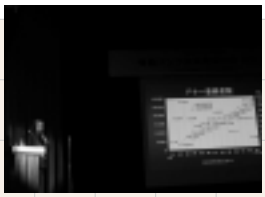
移植5000例到達を記念する全国大会レポート

移植5000例到達記念
骨髄バンク推進全国大会2003

秋晴れに恵まれた日曜日（2003年9月28日）。
東京・早稲田大学大隈講堂で、全国大会が開催されました。
全国から450名の参加者が集った大会の様子を
当日の会場写真を中心にレポートします。
残念ながら参加できなかった方、メッセージだけの参加となった方と
あらためて5000例への思いを共有したいと思います。

第一部

5000例の軌跡



財団の小寺良尚常任理事より、スライドを使って「移植5000例までの軌跡」を報告。

来賓ご挨拶

壇上右側にご来賓の方々。中央より厚生労働大臣（代理：健康局長　田中慶司氏）、日本赤十字社社長（代理：事業局血液事業部長　白戸恒勝氏）、日本さい帯血バンクネットワーク会長　斎藤英彦氏、日本造血細胞移植学会会長　加藤俊一氏、全国骨髄バンク推進連絡協議会会長（代理：副会長　大谷貴子氏）からご祝辞をいただきました。

主催者挨拶

財団の高久史麿理事長より「温かい支援に感謝」の挨拶。

司会を務めていただいたフジテレビアナウンサーの菊間千乃さん。

感謝状贈呈

骨髄移植推進財団に対して、長年、継続してご支援・ご協力をいただいた7団体（社団法人公共広告機構、特定非営利活動法人全国骨髄バンク推進連絡協議会、ライオンズクラブ国際協会330－A地区、中外製薬株式会社、株式会社電通、株式会社清水銀行、株式会社劇団「絵生（えき）」）の皆さまに感謝状が贈られました。

休憩

会場ロビーの壁一面に張られた、
全国の患者さん、ドナーさんから寄せられたメッセージ。
休憩中には、参加者のみなさんが1枚1枚じっくり読む姿が
印象的でした。

●お陰さまで息子は元気で健康そのもの、元の体に戻ったようです。来年2月には、息子にも子供が生まれる予定で、みんなでとても楽しみにしています。（東京都・20歳代男性の母）

●移植を受けてから4年がたちました。拒絶反応があったものの何もかも順調です。まだ移植できない方、苦しい治療に耐えている方がたくさんいらっしゃると思います。それに何もできない、何もしてあげられない自分が本当に悔しいです。つらくて苦しいでしょうが、病気に負けずにがんばってほしいと思います。今は苦しい思いをしても、後からきっといいことがあります。私は信じています。（熊本県・22歳女性）

○骨髄を提供して3年以上がたちました。自己血の貯血や検査のために、東京に何度も足を運んだのがつい先日のようです。現在私は、卒業試験・国家試験のため日々がんばって勉強をしています。順調にいけば、来年には医者になれる予定です。今度は、医師として財団にお世話になることがあるかもしれません。患者さんから信頼される医師になれるようがんばります。（群馬県・33歳男性）

●ドナーの方が「この人に提供してよかった」と思われるような「第2の人生」を送りたいと日々思っています。（兵庫県・41歳男性）

○私が骨髄をプレゼントさせてもらった患者さんは、どこかで元気に暮していると願い、私もいただいた素敵な体験という思い出を宝物にして生きていこうと思っています。（埼玉県・40歳女性）

今回も多くのボランティアさんや財団スタッフが準備から奮闘しました。緊張の受付シーン

会場となったの早稲田大学大隈講堂

記念アピール採択

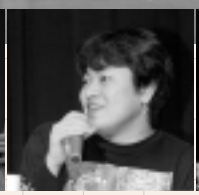
「移植5000例到達記念アピール」を採択。これからも1人でも多くの人を救うために努力することを宣言し、全国大会の幕を閉じました。

第二部

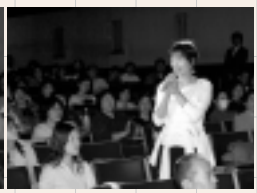
対談

ミステリー作家の横山氏と菊間さんが、お互いにドナー登録者という立場で対談。

あの時、わたしは——



医師、患者家族、移植経験者、骨髄提供者、ボランティアを代表して、それぞれの「忘れられないあの時」を語りました。



会場からも移植5000例にまつわるエピソードや「対面」についての多様な意見が出ました。

●移植5000例、ほんとうによかったですね。世界では、戦争やテロなどで命が消えて行く時代、私はとても幸せな国に生まれ、こうして生きられることに感謝しています。命を大切にしたいと思います。（北海道・40歳男性）

●私はバンクとドナーのおかげで生きています。バンクを立ち上げてくださった方、ドナーとして協力してくださった方、病院のお医者様や看護師の方々、多くの愛情に包まれて今日という日を迎えています。ぜひこれからもドナーが増え、移植を待っている方が一日も早く移植でき、病気を克服されることを期待してやみません!（千葉県・47歳女性）

○骨髄移植5000例到達のお知らせ、深い感動と共に拝受しました。今年、満50歳になりドナー定年まであと1年を切りました。「あの感動を再び」を思いましたが、どうやら私にとっては、「一生に1回」の経験になりそうです。（東京都・50歳女性）

○5000例の中の1例であることに、ひそかな誇りを持っている者の一人です。50歳目前、登録後数年を経てやっと見つかった相手は、なんと外国の方でした。「国際交流にも貢献できる」という嬉しさの反面、責任も大きく感じたものです。提供前の「人の命を預かっている」緊張感、提供を終えて麻酔から覚めた時に味わった感動、涙が出る程の嬉しさが込み上げてきたことを一生忘れたくないと思っています。あれから2年以上たち、まだほんの少し、黒ずんだ採取跡が残っています。たった1つの勲章が消え去るのは惜しい気がします。（徳島県・53歳男性）

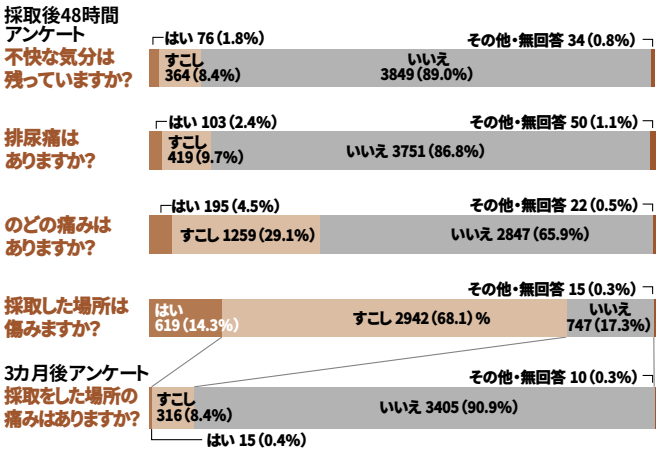
骨髄提供者アンケート報告

（2003年9月改訂）

「また提供したい」と答えた骨髄提供者は77%、「提供に満足している」ご家族は63%。
骨髄提供を経験された方の48時間後と3カ月後の体調、骨髄提供についての意識、ご家族の気持ちなどをアンケートでお答え頂きました。

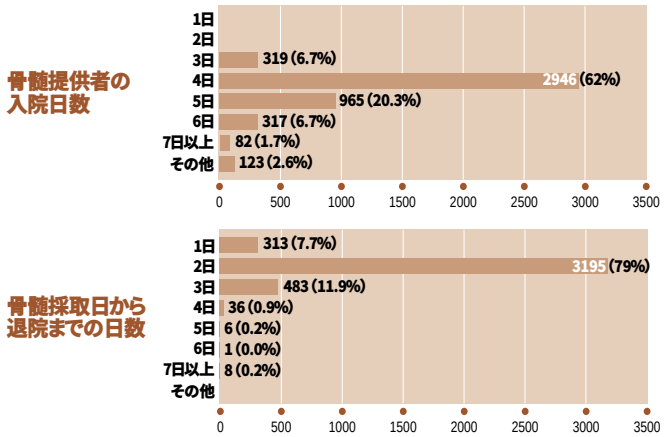
移植後48時間アンケート＝コーディネーターの質問に回答いただく方式。有効回答数4323例。
3カ月後アンケート＝骨髄提供3カ月後に実施。回答方法は書面に回答いただく方式。有効回答数3746例。

採取後の痛みや体調



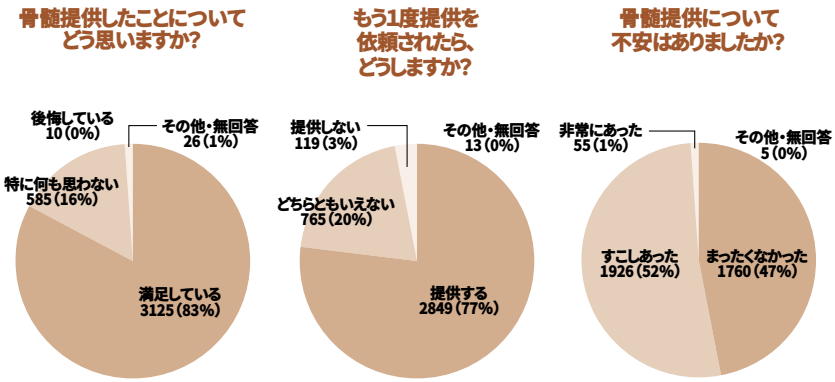
採取した場所の痛みは、48時間後アンケートでは約83%が「痛みがある」と回答していますが、3カ月後のアンケートでは、9%となっています。採取後48時間アンケートでは、「のどの痛み」があると答えた方が34%と他の回答よりも少し高い数字となっています。

骨髄提供に伴う入院日数



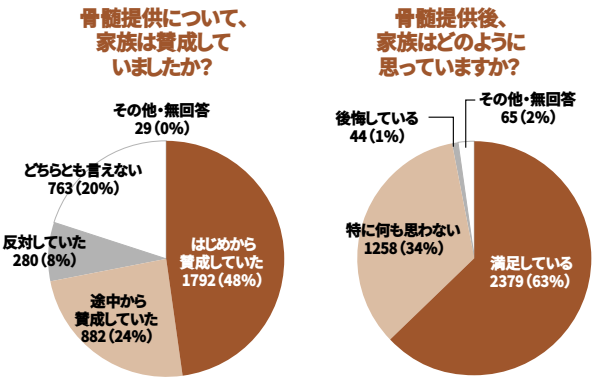
03年3月末までに実施された4752例のうち、解析可能な4042例についての集計報告です。7日以上の入院となった82名のうち、5割は採取病院の事情によるものです。残りの5割の方は健康上の理由により入院が延長していました。

提供体験者の思い　3カ月後アンケート



骨髄提供について「不安があった」と回答した方が53%で、約半数の方が不安を持っていたという結果が出ました。提供後「満足している」と回答された方が83%ありました。また、「もう1度提供したい」との回答が77%と、多くの方が2回目の提供のご意思を持っていらっしゃるという結果でした。

家族の思い　3カ月後アンケート



骨髄提供に「賛成していた」と回答した方は72%、「反対していた」と回答した方が8%、「どちらとも言えない」の回答が20%となりました。提供後「満足している」と回答した方が63%、「後悔している」が1%という結果でした。

ドナー安全情報

骨髄提供における健康被害について

骨髄提供はドナーの安全が最優先されますが、残念ながら骨髄提供に伴う健康被害がおきることがあります。今年おきた主な事例を報告いたします。（2003年10月末現在）。

マスコミ報道により、ドナー登録者をはじめ、関係者のみなさまには、ご心配をおかけしたことと思います。当財団では事例の公開に努めるとともに、それぞれの原因究明と再発防止策を検討する委員会を設置し、調査にあたってまいりました。その後の経過を報告します。

骨髄採取後、長期に渡って腰痛が持続している事例

（2003年3月下旬）

骨髄採取後に長期に渡って腰痛が持続しているという報告がありました。検査により両側腸骨不全骨折、骨髄浮腫と診断されました。その後、再度1週間入院しました。調査の結果、不全骨折（骨盤の一部分にヒビが入った状態）と内出血による血腫の可能性が原因と考えられました。なお、ドナーの方の痛みは快方に向かっています。

骨髄採取後、肺脂肪塞栓症が疑われた事例

（2003年8月中旬）

採取終了後に動脈血の酸素飽和度低下を認め、検査により肺の脂肪塞栓症（肺の一部の毛細血管に脂肪滴がつまること）が疑われました。世界的にも極めてまれな事例であり、全国の採取病院に対し「緊急安全情報」を発出し、厳重な注意を呼びかけました。ドナーはその後、まもなく社会復帰されました。

左腸腰筋部位に血腫を認めた事例

（2003年8月上旬）

採取直後からドナーが下腹部痛を訴え、検査により左腸腰筋部位に血腫（内出血によるかたまり）が確認されました。採取針が骨盤を貫通したことが原因と考えられるため、再発防止の観点から全国の採取病院に対し「緊急安全情報」を発出し、厳重な注意を呼びかけました。ドナーはその後、まもなく社会復帰されています。

過去の事故事例につきましては、骨髄バンクのホームページをご覧ください。
http://www.jmdp.or.jp/donation/index.html

日本骨髄バンクの現状

DATA REPORT

本年8月1日に、日本骨髄バンクを介した移植例が5000例を超え、9月末現在5116例となりました。
ご提供いただいたドナーの皆さまをはじめ、骨髄バンク事業にご支援いただいたみなさまに、心から感謝申し上げます。
今号では、ドナーのコーディネート状況を掲載しました。その他、各種統計につきましては、ホームページで公開しています。
http://www.jmdp.or.jp/about_us/genkyou/index.html

1 | 患者・骨髄提供者（ドナー）のコーディネート状況

（2003年9月末現在、1992年からの累計数）

ドナー登録者数 **175,430人**
（2次検査終了ドナー数：174,979）

患者登録者数 **14,969人**
（患者登録者現在数：2,283）

HLA検索

HLA適合ドナー数 **81,915人**

HLA適合患者数 **12,328人**

コーディネートI

確認検査ドナー数 **28,428人**

確認検査患者数 **8,535人**

コーディネートII

最終同意・移植日程調整 **6,032組**

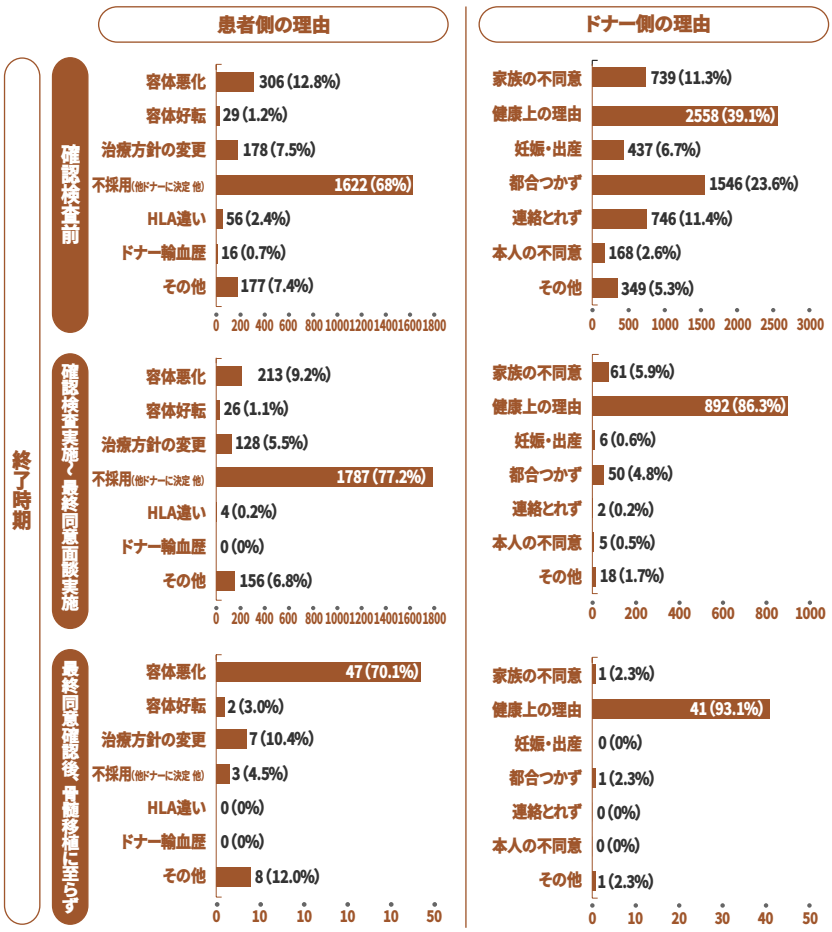
コーディネートIII

骨髄提供・移植実施数 **5,116例**

■患者のHLA適合率は82%で、前回の結果（2003年3月末）より、2%アップしています。適合患者のうち約70%が確認検査に進んでいます。
■骨髄提供をしたドナーさんは、ドナー登録者の約3%、移植を受けた患者さんは、患者登録者の約34%となっています。

2 | ドナーコーディネートの終了理由

（2003年1月1日～10月31日）



■ 2003年1月1日から10月31日までのコーディネート終了件数は、総数で13025件でした。
1）患者側の理由で多いのは、最終同意面談実施まででは、HLAタイピングでより適合するドナーを選択した結果、他ドナーが自動的に終了する場合などの不採用が多く、最終同意後は残念ながら病状悪化による終了となっています。
2）ドナー側の理由は、各段階とも健康上の問題、都合がつかず、家族の不同意となっています。確認検査前では、連絡がつかずが昨年度よりも3%増加しています。住所変更等のご連絡をお願いいたします。

コーディネートの新聞報道について

新聞にドナーの方からの投書が掲載されました。

子育て中のドナー登録者の方から「家族との話し合いの上骨髄提供を決意し、子供が長期休暇の時期に提供を希望したが、コーディネーターから『年末年始やゴールデンウィークは移植を行っていない、また希望時期の春休みがかなり先なので今回のコーディネートは終了する』という事務的な口調の電話があった」というものでした。また、この投書を受けて「年末年始やお盆の病院側の受け入れ態勢が改善されれば、骨髄移植の機会も増えるのではないか」とのご意見も掲載されました。

ドナーの善意に感謝します　十分な説明と心のこもった対応を、研修等で徹底していきます

■投書されたご本人に連絡し、「コーディネーターの対応が事務的な口調、説明が不十分」であったことをお詫びすると共に、再度ご説明申し上げました。
■骨髄バンク登録者は、20歳から50歳までの健康な方で、多忙であることをコーディネーターも十分に認識しています。その中での尊い申し出に応える接遇態度を、研修等を通して徹底してまいります。

ご理解をお願いします　ドナーの安全確保のため、骨髄採取を行えない時期があります

■骨髄提供日程は、患者さんの病状、時間との競争でもあります。患者さんの病状との兼ね合いが最も必要なため、ドナーの方のご希望だけでは決められない難しさがあります。
■善意のドナーの安全は、骨髄バンクの使命です。年末年始など通常の診療体制が整わない時期においては、ドナーの安全確保上、採取を依頼していません。何とぞ、ご理解をお願いします。

10月は骨髄バンク推進月間

全国で150回以上のドナー登録会開催

2003.10・全国

今年から「骨髄バンク推進月間」が10月になりました。月間の変更の正式発表が2カ月前という短い準備期間にも関わらず、地方行政、日赤、ボランティアや関係者の皆さんのご協力により、10月だけで150回以上の登録会が開催されました。季節柄、学園祭や展示会、イベント会場での登録会も多数行われました。

毎年推進月間に作られる新ポスターには、3年連続となる夏目雅子さんが登場。7月から放映された公共広告機構のCMが好評で、連動したポスターが制作されました。

昭和60年 ── その美しい人は、白血病に倒れた。
あの頃、もし日本に骨髄バンクがあり、
あなたのドナー登録があったなら、
ぼくらは、
46歳の夏目雅子さんに会えたのかも知れない。

いま日本で、骨髄移植を待っている白血病の患者さんは3000人。
でも、悲しいことに、そのうちの約1000人に、同じ骨髄型をもった提供者（ドナー）が見つかっていません。
骨髄液の型は、血液型とちがって数万種類もあり、親子の間でも、なかなか一致しません。
病床の患者さんと同じ骨髄液をもっているのは、他ならぬあなたかも知れません。

あなたのドナー登録をお待ちしています。
［骨髄バンク］ 0120-445-445 www.jmdp.or.jp
◎ドナー登録は腕からの10ccの採血ですみます。20歳～50歳のご健康な方に登録をお願いします。財団法人 骨髄移植推進財団

このポスターの制作にあたっては、「オートレース公益資金」の補助を受けました。

東京モーターショーで献血併行ドナー登録会開催

12日間で登録総数234名を達成！

2003.10.25～11.5（推進月間イベント）・千葉

幕張メッセ（千葉市）で開催された第37回東京モーターショーの会場で、主催者の社団法人日本自動車工業会（自工会）の全面的ご協力により献血会に併せて、ドナー登録会が開催されました。国内外のワールドプレミアカーが多数出展されて注目された今年のモーターショーは、開催期間中の総入場者数が140万人を突破する大盛況。その会場内で、登録の説明員として千葉骨髄バンク推進連絡会を中心とした関東近県の骨髄バンクボランティアの連日の活躍に加え、モーターショーを主催する自工会からの一般ボランティアさんの協力で、献血と登録会は大成功を収めました。わずか12日間で234人というドナー登録者数（昨年度の千葉県登録者総数は635名）。大きな成果を得た登録会となりました。

献血会場にて。「『ドナー登録もやっています』と声をかけるのが一番効果的なんです」（千葉の会・鈴木さん）

子供達の遺作絵画展でバンクの認知呼び掛け

「青空の天使たち～天使たちの笑い声が聞こえますか」開催

2003.10.11～10.30（推進月間イベント）・静岡

静岡県と静岡骨髄バンクを推進する会の共催で、静岡県内の3カ所デパートで、10月11日から30日の間、骨髄移植を受けられずに亡くなった子供たちの絵画展が開かれました。

この催しは、急性リンパ性白血病のため6歳で亡くなった平野智也くん、8歳で亡くなった乗松由佳ちゃんの絵画や生前の写真など、2人が確かにこの世に生きたという証しを通じて、骨髄バンクへの理解を深めてもらおうと企画したもの。未完成で終わってしまったちぎり絵や、病床からお母さんに宛てた手紙など、生への希望が込められた作品のひとつひとつに、会場を訪れた人たちは足を止め、熱心に見入っていました。

「浜松ジュニアコーラス」を従え、オープニングセレモニーで見事なソプラノを披露した歌手片平由紀さん。彼女もまた白血病を克服した患者さんのひとりです

さい帯血移植1000例突破記念シンポジウム開催

2003.7.27・東京

日本さい帯血バンクネットワーク主催による「日本さい帯血バンクネットワーク年次報告会2003」が7月27日に東京・大手町のサンケイプラザホールで開催されました。今年6月にさい帯血バンクを介した移植累計数が1000例を突破し、その記念シンポジウムも兼ねた大会となりました。

第1部は式典、第2部は基調報告とパネルディスカッションが行なわれました。さい帯血バンクのスタッフの皆さんは患者さんとお会いする機会がほとんどないため、第2部にはさい帯血移植を受けた患者さんとして、加藤徳男さんが元気に登場されました。パネルディスカッションでは、各さい帯血バンクの方々が登場し、活発な議論が展開されました。今大会は、今後のさい帯血バンクの発展に、大きな契機となるものと思われます。

全国より、さい帯血バンク関係者、移植を受けた患者さん、ボランティアさんなど約200名が参加しました

新極真会の世界大会会場で、ドナー登録を呼びかけ

2003.10.4～5・東京

10月4日、5日に東京体育館で開催された「骨髄バンクチャリティー第8回オープントーナメント全世界空手道選手権大会」の会場内で、献血と骨髄バンクキャンペーン登録会、募金活動が行われました。この大会は「新極真会」に名称刷新後初めての大きな大会とあって、5日には歌手の長渕剛さんによる「新極真会の歌」のお披露目などトーナメント以外の見所もたくさんあり、多くの方に骨髄バンクを知っていただくよい機会となりました。

新極真会には、以前から「生命の尊さをみずから感じる社会づくりのため」と、イベントを通じて幅広くご支援いただいています

唐沢寿明さん・研音グループのチャリティーオークション、前回上回る大反響

2003.7.28～8.11・ネットオークション

俳優の唐沢寿明さんが、所属プロダクションのタレント仲間に呼びかけて実現した「骨髄バンク チャリティーマーケット2003」の収益金、約418万円が当財団に寄付されました。一昨年、新聞で当財団の財政危機を知った唐沢さんの提案で実現し、所属事務所の研音グループのホームページと携帯サイト上でオークションが実施されたものです。

2回目の今回は前回を上回る数のタレントさんが参加。プライベートや仕事で使用した数々のアイテムが出品され、大反響を呼びました。唐沢さんをはじめ研音のスタッフの皆さま、オークションにご参加いただいた方々に、心からお礼申し上げます。

映画「半落ち」1月10日より公開

原作者の横山氏もそのシナリオに涙、「いい映画になると思っています」

本紙2ページでもお伝えしたとおり、横山秀夫さんの「命の意味を問う」衝撃と感動のミステリー小説「半落ち」がお正月映画としてスクリーンに登場します。

「半落ち」――。そのインパクトのあるタイトルの意味は、「容疑者が容疑を一部自供するも、完全に自供していない状態」を指す警察用語。物語は、愛する妻をその手にかけたと自首してきた現役警部・梶聡一郎が、容疑を認めながらも、事件後自首するまでの「空白の2日間」についてだけは全く語らない…、この「半落ち」状態の梶をめぐって、捜査官、検事、弁護士、判事、そして新聞記者らが、組織のしがらみに翻弄されながら、梶の人生に隠された秘密を探ろうと苦闘していく…というもの。

30万部を突破した現在も増刷を重ねるこのベストセラーの映画化には、30社以上の配給会社が名乗りをあげたとか。キャストは主人公 梶聡一郎役に寺尾聰、取り調べの刑事に柴田恭兵。他に原田美枝子、吉岡秀隆、鶴田真由、國村準、伊原剛志、樹木希林ら実力派が揃いました。

骨髄バンクの「患者とドナーの対面」や、老人介護、出世競争など、日本が抱えるさまざまな問題が提起されていますが、見どころは主人公の「半落ち」の理由。作品全体に流れる「人が人として輝いて生きるための〝よすが〟とは何か?」というテーマは、背景は違えども骨髄バンクのボランティア活動やドナー登録という行為と共通するものがあるのではないでしょうか?「相手から光をもう1度受けるというテーマの本質が、とても誠実に描かれている(横山氏)」、「映画館を出られたお客様ご自身で、原作にない『第7章』を作っていただけたら(製作プロデューサー)」との言葉の通り、映画を楽しみながら、ドナー登録の意義を改めて考える機会となりそうです。

1月10日より全国東映系でロードショーです。

●donorsnetで製作発表記者会見レポート、横山秀夫氏インタビューを公開中です。

12月初旬に完成予定で、撮影は順調に進んでいるとのこと。
「必ずいい映画になると思うので、みなさん是非観てください」(横山氏)

チャリティー試写会にご招待!

東映株式会社さまのご厚意により、都内で開かれる試写会に先着ペア50組100名様を無料でご招待します! またお越しになれない皆さんにも、当日劇場窓口より300円(学生・小人は200円)の割引があります。

チャリティー試写会

日時
2004年1月7日(水) 18:00開場 18:30開映

場所
ヤクルトホール(東京都港区東新橋1-1-19ヤクルト本社ビル)

応募方法
官製ハガキに①お名前②ご住所③電話番号④骨髄バンクとの関わり(ドナー・患者・寄付者など)を明記の上、郵送でお申し込みください。当選は招待状の発送をもってかえさせていただきます。

応募先
〒104-8108 東京都中央区銀座3-2-17
東映株式会社 映画宣伝部 宣伝室「骨髄バンク」係 宛

日本骨髄バンクニュース 読者優待割引券

■この割引券を切りとって劇場窓口にお出し下さい。
■1枚につき3名様まで、それぞれ大人300円、学生・小人200円を割引します。
■上映期間中、上映劇場にて有効です。
■シニア優待(60歳以上)等、他の割引との併用はできません。
■割引は、オールナイト、レイトショーおよび一部の劇場を除きます。
上映劇場は新聞広告・下記ホームページ等でご確認下さい。

半落ち
【はんおち】警察用語。容疑者が容疑を一部自供するも完全に自供していない状態を指す。

半落ちホームページ
http://www.hanochi.co.jp/

お問い合わせ・資料請求は 日本骨髄バンク
0120-445-445 http://www.jmdp.or.jp/

骨髄バンク 近畿地区「コーディネーター」募集のお知らせ

**コーディネーターが不足している地域で新規のコーディネーターを養成する「コーディネーター養成研修会」を開催します。
今回は近畿地区限定の募集となります。
受講を希望する方は、必ず「ハガキ」で、住所、氏名、年齢、および「コーディネーター養成研修会要項希望」とご記入の上、財団宛てにお送りください。募集要項と受講申請書をお送りします。
詳細は、財団ホームページ(http://www.jmdp.or.jp/)にも掲載しています。**

●募集地域および人数
近畿地区で活動できる方　若干名

●応募資格
25～55歳までの健康で、骨髄バンクの必要性を理解しており、コーディネート業務に専念できる方。ただし、骨髄移植適応患者や家族、特定患者の支援活動をしている方を除く。

●研修期間
2004年2月上旬～2004年4月末

●研修内容
近隣の指定病院での実務研修(10回以上／不定期)、集合研修(場所未定)など

●受講費用
受講料(教材費を含む):無料
交通費:実務研修分は財団負担。集合研修分は受講生負担(補助あり)。

●コーディネーターの身分
非常勤嘱託

●業務内容
・骨髄提供者(ドナー)および関係者に対する連絡調整
・ドナーに対する骨髄提供についての説明や各種手続き
・ドナーおよび家族の自発的意思に基づく骨髄提供同意の確認
・骨髄提供後のドナー訪問や健康状況等の追跡調査

●「コーディネーター養成研修会要項」請求先
〒101-0054　東京都千代田区神田錦町3-19　廣瀬第2ビル　7階
財団法人骨髄移植推進財団「コーディネーター養成研修会」係

●応募締切
2004年1月15日(木)必着

「移植希望患者へ寄付依頼」の報道について

9月1・2日、マスコミ各紙(ブロック紙、地方新聞、経済新聞)に「移植希望患者へ寄付依頼、脅迫と同じ――抗議受け中止」という見出しでの報道がなされました。多くの皆様にご心配をおかけしたことと存じます。この報道は、当財団の募金の趣旨が理解されず、誠に残念であると思います。当財団の行なってきた寄付金募集の経緯、考え方について説明いたします。

募金活動の経緯、考え方

骨髄バンク事業の進展により、年間の移植件数が400件を超えた1997年頃より、骨髄バンクの事業資金確保が極めて難しい状況となり、一方で国庫補助金の増額もなかったため、当財団としては、患者負担金の増額が検討されました。しかし、それは最後の手段と考え、その前に、広く国民一般の方々に募金を呼びかけることとしました。

そこで1998年より、骨髄バンクニュースに募金呼びかけ文と郵便振替用紙を同封することとし、今日まで行なってきています。なお、ドナー登録者や問合せ者の方々、登録患者さんに、振替用紙を同封すべきか否かについて、真剣な論議がありました。

募金は、患者さんの負担を軽減することが目的であり、あくまでも自由意思であること、また、患者さんやドナー登録者ご本人からの募金を期待する以上に、周りの方々の協力を呼びかけてほしい旨を説明する文書を付けることとして実施されたものです。

これまで、患者・家族の方々から、特にクレームはなかったのですが、本年7月～8月に数名の患者関係者の方々から「弱い立場の患者家族は、なかなか言い出せないこと、募金しないと移植に影響がでるかも知れないと誤解を与えかねない」との指摘と同封を止めてほしい旨の要請が当財団に寄せられました。

今後の対応とお願い

早速、当財団は、こうした要望について検討を行いました。その結果、2002年4月の患者負担金値上げ改訂で、患者さんの負担が増したこともあり、また、詳しい説明書を付けても誤解や嫌悪感を持たれる方は少なからずおられることから、患者さんへのニュース送付では郵便振替用紙の同封は中止することとしました。どうか、当財団の募金活動の趣旨、真意について、皆様のご理解をお願い申し上げます。

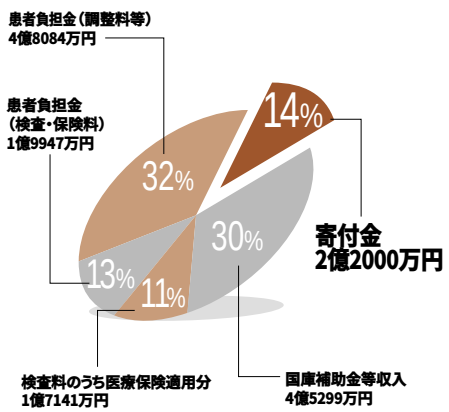
募金活動は、患者さんの負担軽減を目指して行なっています。これまでの皆様のご支援に厚く御礼申し上げますとともに、今後とも、ご理解ご協力を心からお願い申し上げます。

募金のお礼とお願い

骨髄バンクの運営は、国庫補助金などの公的資金のほか、患者さんの負担金と、皆さまからの寄付金によって支えられています。皆さまの寄付金は、患者さんの負担金の減免の費用、普及啓発やコーディネート活動のために使われます。国に対しては、国庫補助金の増額と医療保険適用により、患者さんの負担を減らすお願いをしています。

現在の募金方法は、各種イベントでの募金活動、企業・団体への募金活動の要請、ボランティア団体、個人による支援募金、ニュース同封での郵便振替募金、クレジットカード募金、インターネット募金、オークション募金など、幅広い方法で行っています。
平成14年度の募金総額は2億3000万円、国民の皆さまのご支援に深く感謝します。また、これからもご理解とご協力をお願いします。

●平成15年度の予算　[収入] 15億2480万円



皆さまの善意をお寄せください。

銀行振込
0120-377-465までお電話ください。みずほ銀行本支店間での手数料が無料になる専用振込用紙をお送りします。

郵便振替
振替用紙で、郵便局からお振込みをお願いします(手数料は当財団負担)。
口座番号00130-2-609313

クレジットカード募金

1.お電話で
ご使用になるカードをお手元にご用意のうえ、0120-377-465までお名前・ご住所・電話番号・カード会社・カード番号・カードの有効期限・ご寄付の金額をお知らせください。

2.インターネットから
http://www.jmdp.or.jp/reg/help_us/how_to.html
NTTコミュニケーションズの電子決済サービス「Livuy(リヴァイ)」を利用したインターネットの決済サービスです。お申し込みいただいた金額をご利用のカード会社の規約に従って、通常のカード利用と同様に口座から振り替えさせていただきます。

3.骨髄バンク提携クレジットカード
クレジットカードによるお支払い額の0.5%が骨髄バンクに寄付される骨髄バンクサポーターカードは、毎年入会月に、指定された1万円または3000円が自動的に寄付される仕組みも付いています。入会申込書を0120-377-465までご請求ください。

オートレース Auto Race
日本小型自動車振興会からの補助について
本年度も普及啓発ポスター、パンフレット、リーフレットは「オートレース公益資金」の補助により 発行しています。